保育者への提言

堀内　康人

私が園長をしている、ある小さな保育所での出来事でした。私も庭にでて、子どもと遊んでおりました。ふと足洗い場を見ると、水があふれ、その上の鉄格子をひたし、流れだしておりました。私は排水口がつまったなと思い、重い鉄格子をひっぱりあげるフックをもってきて、それを足洗い場の外に移動し、腕まくりして排水口にひっかかっているくち葉をすくいあげておりました。いつの間にか子どもたちが、私を取りかこんで、排水口から勢いよく流れだす水を興味深そうに眺めていました。くち葉や砂をすくいあげているうちに、たまった水が排水口から流れだし、そのあとに泥や砂、そしてくち葉が残りました。それまでだまって見ていた子どもたちの一人が、突然叫びました。「園長先生、公害だね」と。最後に水の流れが排水口から落ちてゆく瞬間のことでしたので、私はその一瞬、胸の詰まるような気持で、その子どもの言葉の見事さに圧倒されました。まわりにいた子どもたちは一斉に「公害だ！　公害だ！」と騒ぎたてました。

私はバケツを持ってきて、腰をかがめ、膝をついて、子どもの楽しそうにいう公害を、手ですくいあげながら、子どもたちにきいてみました。「園長先生がこうして、きたない公害をお掃除しなくてもよいようにするには、どうしたらいいの」すると年長の子どもがいいました。「砂場の砂をみんながもってきて流すからだよ」と。

またある日のこと、私がホールにはいっていくと子ども三人がピアノのうしろでなにかをしていました。私は子どもたちに、「さあ！そんなところでなにしているの、おへやにもどりましょう、先生が、待ってますよ」といいますと、子どもの一人が、「園長先生は、わかっちゃいねーや」というのです。たしかに子どものいう通り、子どもたちがなにしているかわからないままに、「そんなところでなにしているの」とたずねたので、それに対して、子どもはいかにも三

人組で秘密のことをやっているのだといわんばかりの気持ちが、その「わかっちゃいねーや」という言葉ににじみでているのでした。

さて、こんな経験は、現場の保育者でしたら、毎日のように、数限りなく経験することでしょう。しかし私どものような大学の研究室にいることのほうが多い者には、全く新鮮な感動に近い経験です。

モンテッソーリは四歳の女の子が、種々の大きさの円柱を木製のはめこみ台に入れる作業を、非常に注意深くやり、全部の円柱をはめこんでしまうと、再びとりだし、同じことを四十回以上も繰返している姿を見て感動しました。そこで彼女は、ピアノの前にすわり、他の子どもたちに歌をうたう誘いをかけても、そのはめこみをやっている女の子は、あたかも自分をとりまいているともだちを完全に忘れでもしているように、身動きもしないで作業を続け、そのうちに作業をやめ、目を輝かしニコニコ笑って、さも満足したように立ち上がる子ども、そこに真の安息感と内面的に強められた子どもの姿を見たのでした。

モンテッソーリはこうした子どもの姿に感動して、なにを感じとったのでしょうか、それは従来の心理学者たちの数多い学説が、目の前で一挙にくずれ落ちるのを見るような気持ちの中で、幼児でも長時間注意力を集中できるということでした。彼女は人間はだれでも、仕事に没頭しているときは、完全な孤独、あらゆる事物、あらゆる人間からの完全な隔離を求める内的要求があり、偉大な人間はとくにこうした完全な専心状態をもちうる者であり、そこで子どもたちを早くから物事に集中できる子どもに教育することが大切であることを主張しています。

モンテッソーリの著作などを読んでおりますと、子どもの生活のあらゆる場面で、彼女は実に数多くの新鮮な感動をすると同時に、それをただ感動に終わらせないで、いつも鋭い観察へと掘り下げることを忘れませんでした。ところで観察ということに関して彼女はこうもいっております、「観察をする際には、複雑な装置も特殊技能もいりません、また鋭い解釈能力も不必要です。子どもの心の、手伝いをしようという、心ひそかな覚悟だけで足りるのです」と。

さてここで、次のような図式を書いてみました。

子どもの現実→感動→観察→子どもの心の手伝い→心ひそかな覚悟

この図式を現場の保育者の問題と関連させて考えてみましょう。最近私はある区立保育園の保母さんから熱心にやっておられる研究会の研究経過報告資料をいただきました。保母さんの

話では、こうして一年かかってそれぞれのグループで行なった研究経過を苦労してまとめたが、どうも自分たちのグループは研究の進め方がわからなくなってしまったので、指導してくれないかとのことでした。私がその研究資料をみて感じたことですが、よくも忙しい中でこれまでまとめることができたものだ、ということでしたが、全体的にみて、報告資料をまとめなければならないということが先にばかりでていて、折角、子どもたちの現実に、興味ある問題、困った問題がたくさんあるにもかかわらず、それがただならべられてあるだけで、たしかに大いに興味があり、全く困った問題として感動的に取上げられていないのです。そこで当然のことながらきわめて平板で常識的に、すぐ心理学者のやりそうな調査統計か教育学者や社会学者がやりそうな社会調査式になってしまっているのです。たとえば乳幼児のおもちゃの研究で、せっかく現場の保母さんが自分たちで工夫して作った玩具、それが子どもたちにどのようにむかえ入れられ、子どもたちがそのさきをどのように創りだしていったかなどが追求されれば、とめどもなく生き生きと楽しいものに発展するだろうに、それをやらないで、ブランコ・ジャングルジムというようなことでまとめられているのです。

感動したら追いかけろ、追いかけるためにはきょろきょろ、あちらを見たりこちらを見たりしていてはつかまえることはできない、頭を、働かして観察点を徐々にしぼっていかねばならないのです。

次に報告資料を見て気がつくことは、子どもの心の手伝いというポイントがそれて、いつの間にか保母さんたちの研究のまとめに気をとられてしまっているということです。日常の保育をそっちのけにして、子どもには、なんの興味もないようなものを無理に与えられ、それに興味を示すか示さないかなどということを長々とやって、その結果をまとめているのです。これでは子どもの心のお手伝いなどということから全くかけはなれてしまいます。モンテッソーリはこんなことをいっています、「教師は、子どもの形成やしつけの上に、いかなる直接的影響をも与えてはならないこと、しかも子どものもっている隠れた力に、全幅の信頼をもつべきで、自分の中にひそんでいるあらゆる虚栄心を沈黙させるよう、忍耐しなければ、決してよい結果を得ることができないでしょう」と。大変参考になる言葉です。

最後に研究報告資料をみて感ずることは、図式の最後の心ひそかな覚悟がそこにでてきていない、ということでしょう。考えようによってはまとめられた研究報告はあくまで報告であって、一番大切なのは報告が出来上がる経過で、研究しようとする問

題と子どもとのかかわり合いを大切にしながら、子どもの生活を乱さないで問題をひろい上げたり、子どもを観察して行く姿勢ができておれば、しぜんと報告の中にそれがにじみだすことでしょう。たとえば子どもの指しゃぶりがやむまでの経過でも通り一ぺんに、最初のころははげしかった、それがだんだんはげしくなくなり、何ヵ月後にはやんだ、というようなことでは、どんな場合でもそうした一般的傾向をたどるにきまっています、そんなことより、子どものそうした習癖をいろいろな方法で試み、努力して直そうという保育者の第一義的な仕事が研究にでてこなければならないはずです。それには保育者の心ひそかな覚悟のほどが充実していなければならないと思います。いつの間にか保育者の研究のことになってしまいましたが、保育者としていつも考えなければならないことは、子どもは努力しないで、なんの苦労もなくこのむずかしい日本語を短い期間に身につけるほど素晴しい存在ですがおとなはなにをやるにも努力しなければならず、苦労しないではなにごともうまくいきません。そこが本質的にちがう点です。毎日保育者は苦心して保育を計画し実行して行く気概をもち続けなければ、なんの苦労もなくむずかしいことをどんどんやってのけ、新しい知識を次から次へと、(それが表面的にせよ)おぼえ込んでしまう子どもにおしまくられてしまうことでしょう。

四歳の子どもがいとも簡単に「公害」などという言葉を生活の中にもちこみ、おとなにむかって「わかっちゃいねーや」という始末です。小学校の先生は、もう八教科を一人で教えることに対して、そんなことはとても無理なことだという問題が大きく取上げられています。幼稚園の先生でもよほど努力しないかぎり六領域の生活を子どもに楽しく経験させることは不可能でしょう。子どものより良い保育を目ざす保育者は、今すぐにでも自分自身の生活のテンポを切替え、意欲的に勉強を再開しなければならないと思います。

(東京家政大学)